

暗黒の欠片

VOL.1 鬼子隠し

奇怪伯爵 著

それが、夢だとは思えなかった。

朝を迎えると、いつも思う。

軽い頭痛とともに、爛れた記憶が蘇る。

闇夜に沈む寒村に、私は素足で佇み……

そして恐怖に怯えながら、何かをずっと待っている。

どこからともなく聞こえる泣き声。

猫のように聞こえたそれは、いつしか赤子のものに替わっていた。

素足に浸み込む冷たさは、尋常ではない。

赤子の声は次第に勢いを増し、私の鼓膜を圧迫する。

脳に突き抜けるような甲高い声。

それは、叫びにも悲鳴にも似た、苦痛や恐怖を吐露したシグナルに違いない。

私は、その声の主を探す。

非常に近い存在であることは、間違いなかった。

しかし、私の両目は何も捉えることができない。

そういえば、私の村には言い伝えがあった。

いや、民話といった方が正しいかもしれない。

なぜなら、それはあまりに現実から乖離した物語だから。

身分の違う二人の、悲恋物語。

男は殺され、娘は自分の家族と村人を呪った。

その呪はお腹の子へと移ろい、世にも怖ろしい憂いとなる。

出産のショックで娘は死に、生れた赤子はその日のうちに姿を消した。

以来、村では子供が失踪する事件が、後を絶たないという。

いつしか村では、消えた赤子を鬼子と呼ぶようになった。

村の子供たちの失踪は、神ならぬ鬼子の仕業ということで、『鬼子隠し』という。

大人になれば、その話が真実味に欠けていることが分かった。

『鬼子』など、存在するはずがなかった。

偶然の一致によって、たまたまリアリティという産物を纏っただけ。

または、子供を戒めるための教訓。

けれどもそれは、何故か私の心奥に留まり、妙な不安を時折運ぶのだった。

そう、私は理解している。

『鬼子』の話が軽いトラウマとなり、私の精神を僅かながらに歪めてしまったことを。だから、私はとても残酷な夢を見る。

友人の死。

夢のなかでは、親友の沙織が溺死した。

とても深い、暗黒の水面に彼女は浮かび、必死の抵抗を試みた。

けれど、氷のような湖水は彼女の感覚を奪う。

沙織の吐きだす息だけが、異常に白い。

沙織は苦悶の表情を浮かべ、まもなく訪れる絶望に喘いだ。

沙織の周囲に、水泡が現れては消えた。

湖底から、何かがやってくる。

私は、それが何であるかを直感した。

例えようもない戦慄が、私の身体を駆け上がってくる。

逃げて！

私は、思わず声を上げる。

しかし、それは沙織には届かない。

この世に未練を残し、留まることを選択した魂たちが、寂しさに耐えかねているのだ。

孤独感を紛らわすため、自分と同じ境遇の魂を欲しているのだ。

そう。彼らは、村で失踪を遂げた人間たち。

決して成仏できない、汚された魂たち。

彼らは沙織にしがみつき、もがき続けた。

そんなことをしても無駄なのに。

成仏することなんか、できないのに。

私は涙を流しながら、呟いた。

やがて、自ずと悟った霊魂たちは、沙織の身体を伴って、湖底へと姿を消した。

このような夢が、毎日のように続いた。

ただ夢を見るだけなら、まだましだった。

それがどんなに残酷であろうと、虚実と割り切れるからだ。

しかし.....。

繰り返し浮かびあがる虚実は、徐々に現実感を帯びてくる。

拷問に近い私の脳内イメージは延々とそのビジョンを繰り返し、やがて最悪の結果を導いた。

沙織が溺死した知らせは、夏休みのとある日に聞いた。

私は、予知夢を見ていた。

その現実が浮き彫りにされたとき、途方もない恐怖が押し寄せた。

友人の死を予感しながら何もできなかった徒労感が、私を痛めつけた。

私は何故か、鬼子と沙織の死を結びつけて考えていたように思う。

この村に根付く不吉な民話が、私の深層心理に懲のように絡みついている気がしてならなかった。

夢は、沙織だけに止まらなかった。

私が夢を見た後、その人物は失踪したり、または死体で発見されるのだった。

私は自分の夢がとても怖く、この事実を誰かに相談しようと考えた。

しかし、それに足るに相応しい人物は存在せず、一人で不安と闘わざるを得なかった。

友人に話せば、気味悪がられることは間違いなかった。

学校の先生には、頭がおかしくなったと思われる可能性があった。

そうすると、最後は家族だけが頼みの綱だったのだけれど……。

それができない理由が、私にはあった。

私が、この家で育つうちに芽生えた違和感。

確証も何もない。

虐待があった訳でも、何か事件があった訳でもない。

父母は至って普通であるし、祖父母も健在だった。

外から見れば、至って一般的な家庭に見えるだろう。

愛情だって、感じられる時もあった。

しかし、私の心の奥底で、この場所が本当に自分の居るべき場所であるかという疑問が燻っている。

それは、成長するにつれて次第に強さを増している気がする。

もしかすると、私は養子なのではないかと考えるようにもなった。

それならば、この違和感にも説明がつく。

もともと、血が繋がっていないならば、それは当然だった。

そして、それも仕方のないことだと割り切ることもできよう。

もう少し大人になれば、私もその答えを探し出せるかもしれない。

そのような思いとともに、私は毎日を積み重ねていった。

遠くで、太鼓の音が響いていた。

ようやく、私は今日が祭の日だと理解した。

そうか。

今日は、重要な日だったんだ……。

沙織が死に、その他の犠牲者も出てしまった年だ。

村は、鬼子の怒りを鎮めなければならないのだ。

日がすっかり落ち、私は提灯に照らされた僅かな光を頼りに、神社へと向かった。

次第に太鼓と笛の音が、強くなっていく。

長い石段を昇りきると、妙にもの寂しい雰囲気の境内が目に入った。

あれっ。

お祭りって、こんな感じだった？

私の中で、疑問が生じた。

皆は、どこにいるの？

太鼓のリズムが、次第に早くなっていく。

鳥の鳴き声のように甲高い笛の音が、それを追隨しているようだった。

私は眩暈を感じ、その場に座り込んでしまった。

ひどく、気分が悪い。

所々に掲げられた提灯の明かりが歪み、しだいに周囲を回り始める。

突然、神社の境内から何かが飛び出してきた。

それは、私の目前に立ちはだかり、激しく地を踏んだ。

私は、それが何であるかを知っている。

鬼子役の村人のはずだった。

毎年、村の小学生が鬼子に扮し、祭られる役を担うのだ。

しかし、私はその勢いに圧倒されてしまった。

鬼の面をつけて狂ったように暴れまわるその姿は、まるで本当に鬼子が出現したかのようだった。

今まで、こんな鬼子を演じた子などいなかった。

子役は、身体全体を使って鬼子の感情を具現化していた。

親を失くし、村人を呪った凄まじいばかりの怒りが、私の全身を貫いていった。

お面越しに覗く小さな双眸は、子供のあどけなさとは皆無だった。

憎悪に染まった真っ赤な瞳が、燃えるような感情を浮かばせていた。

私はその眼力に耐えられなくなり、後ずさりした。

なおも、鬼子は迫ってくる。

もう、これが演技とは思えなかった。

鬼子の放出された怒りは、私に対してのものだと確認した。

何故？

私が予知夢を見たから？

私には、鬼子に関わる因果があるの？

私は、下がった。

ただただ、前から迫りくる圧力から逃れるために。

私の後方には、今しがた上ってきた石段があることも考えずに。

突然、私は重力を感じなくなった。

鬼子の姿が消え、太鼓の音が遠のいていった。

提灯の光が星のように流れ、私は暗黒の底へと落ちていく。

全ての景色が消え、音が消え、何もかもが消えた。

それがひどく長い時間、続いたような気がした。

突然の、乾いた音が響く。

頭の中で、何かが割れたような感覚だった……。

気がつく、私は漆黒の世界にいた。

墨汁を溜めた容器の底にいるような感覚。

空気の流れまでもが、澱んでいる気がした。

足が、冷たかった。

石段から落ちたはずだった。

自分の身体のダメージを確認するのが、恐ろしかった。

それでも私は、立ち上がることができた。

いつの間にか、私は素足になっていた。

先に感じた冷たさは、踏みしめた土のものだった。

朦朧とする頭の中で、記憶が急速に蘇る。

この状況を、私は知っている。

すぐにそれが、私の見た夢と結びついた。

もちろん、周囲には誰もいない。

そこへ……。

幽かに漂ってくる音。

それが、私の神経を撫でた。

心臓の鼓動が大きく一回、激しく打った。

音量が、次第に増してくる。

それに併せ、早まっていく私の鼓動。

徐々に明確になっていく音の正体に、私は悲鳴を上げた。

赤ちゃんの泣き声。

母親を求める悲痛の叫び。

私は、直感した。

この声の主は鬼子である、と。

単なる民話だと思っていた話が、事実だったとしたら。

この世に霊が、存在するとしたら。

鬼子の恨みが、霊的な現象を伴って、具現化したのではないだろうか……？

民話では、鬼子の父親は修行僧だったという。

野垂れ死に寸前のところを、村の長者によって助けられた。

そして鬼子の母親は、その長者の娘だった。

とても許される結婚ではない。

修行僧は殺され、娘は悲しみの内に出産したが、既に心身は衰弱していた。

出産のショックから、娘は命を落としたというのが、民話の大筋だ。

しかし、最も恐ろしいのは、その産み落とした子だった。

それは、まさに鬼のような容姿をした赤子だったという。

自ら母の胎内から出ると、怖れおののく村人を尻目に、山の中へ消えていったという。

しかし——。

あまりに突拍子もない結末といえよう。

仮に、ここまでが事実としても、その赤子は生き延びることなど不可能だった。

いくら鬼の容姿と言っても、人から生まれた存在である。

すぐに死が訪れ、その体は野犬にでも食べられてしまったに違いない。

そこまで考えて、私は悲鳴を上げた。

赤ん坊の泣き声が、非常に近くまで迫ってきたからだった。

私の足元の土が盛り上がり、中からおぞましい姿をした虫が這い出してきた。

見れば、それは辺り一面で繰り広げられている。

堪らず、私は駆け出した。

剥き出しの足が、その奇怪な虫を踏みつけていく。

踏んでも踏んでも、それは次々に土中から姿を現した。

逃げながら、私は考えた。

鬼子の肉体は、死滅した。

けれど、その怒りと哀しみにまみれた魂は……？

この村に、その魂が残っているのだとしたら……。

その魂は、一体どこに……。

私は、足を止めた。

ある恐ろしい考えが、脳裡を横切ったからだ。

何故、私は生きている？

あの石段の高さは、相当なものだった。

たとえ、一命を取り留めたとしても、五体満足はありえない。

それなのに、私は走って逃げた。

どうして、走ることができた？

何故、体に傷を負っていないのだろう？

私は、呆然と立ちすくむ。

そこに、何かが近づいてきた。

軋む音を立てて、その物体はゆっくりと距離を詰めてくる。

それは、私の目前で止まった。

私は、目を疑った。

なんという奇妙な物体だろうか。

形状は、乳母車のようなものだった。

しかし、それを構成しているパーツを見て、私は言葉を失った。

それは、人骨だった。

私は、それを押してきた人物に目を移した。

暗闇でよく見えないが、身なりからの想像と合わせれば、老婆のようだった。

老婆は何も言わず、ただ一度軽く頷いたように見えた。

私は、全てを理解した。

この乳母車は、鬼子を乗せるためのもの。

迎えにきたのだ。

私の本当の居場所まで、案内するために。

言ってみれば、鬼子の存在は村人の罪を問うもの。

その罪の償いに、母は私を村人に育てさせるのかもしれない。

自分では育てることができなかったから。

もし、私が子供を産むことになったら、また同じことが起きるのだろうか？

乳母車に揺られながら、私は闇を見据えていた。

以上が、失踪した〇〇県××郡△△村の高校生・粗峰ともかの手記である。

これは自室の机上にあったもので、本人が失踪する直前に書き記したことが分かっている。

これが真実に基づいたものとは誰も信じていないが、奇妙なほど手懸かりに乏しい現実が存在するのも確かだ。

ちなみに、粗峰ともかには妊娠の疑いがあったことも忘れてはならない。

暗黒の欠片 VOL.1

鬼子隠し

<http://p.booklog.jp/book/16802>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/16802>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16802>